

る■一 私に將來畫家を望むもの美術學校に入學するに白馬會と太平洋畫會と何れの研究所が勉強に都合よろしきや 二 ワツトマンに描くに浸み込みて繪具舒びず如何なる理由にや 三 大阪に開かる、講習會の規則は前回と同一なりや又自宅より通學してよろしきや(大阪乙部笑波)◎一 何れにても同じ そのうち本會研究所にても毎日墨繪の研究をなすべき設備をなすべし 二 保存法悪しきためなりワツトマンは濕氣を含むと斑點を生じ終に使用に耐えず紙に其製造年號を漉込みあるはこれが爲めなり、毎年四五月頃には其年製造のもの舶來すべし新に求むる時年號を見よ。保存法はプリキ又は紙筒にてもなるべく空氣の流通を防ぎて濕氣なき處に置くべし 三 大概同じなり本號の會告を見られよ 勿論自宅より通學して差支なし ■一 丸山先生のお話にてインデゴの代用として日本畫の藍棒を用ひてもよいが冬は用ゐられぬとあり如何なる故にや 二 日本繪具のタイシヤ棒はライトレツドの代用とならぬにや(陸前YK生)◎冬は凝結して戸外にて使用不便なり室内にて溶き皿を暖ため用ふればよろし 二 代用とならぬ事もなければ不充分的なり ■一 肉筆臨本を額面として使用し得る様な風景畫を得らるゝや 二 大下丸山先生等の常に使用せらるゝ寫生箱ほどの位ひの大きさにや 三 昨暮上野で拜見した大下先

生の赤城の畫はあんな大きなものを山へ擔いて行かれたのですか 又は畫室にて延ばされたのですか(KT)◎一 額面となるべし 二 通常は九ツ切位ひの寫生箱、一ヶ所に滞在する時は二ツ切又は四ツ切位ひの大なる畫囊を携えるあり 三 あれ繪は赤城で九ツ切に充分精密に寫して來て畫室で仕上たものなり半切仕ひは現場にて仕上る事珍らからず ■一 小生は鷄をスケッチして畫きたるに極忠實の心組にて作製したるに標本的のものとなれり其後觀察を密にして筆を粗にせよとの故此度は龜をスケッチして少しく筆を粗にせしが忠實の點に足らざるやの感あり要するに水彩畫の本色と標本的との其間の消息那邊にありや 二 修養中は殊更に筆を粗にして水彩畫風にと思ふよりも矢張り標本的でも忠實に重きを置く方宜敷や追々研究を重ねれば目下標本的にても他日眞の水彩畫を畫き得るやうになりますか(兵庫MY生)◎一 二 共『みづゑ』二十二、二十三のイースト氏の寫生談、二十三の主觀と客觀等熟讀せらるれば自ら答を得べし ■大下先生の金港堂發行水彩畫帖第一輯の「箱根の殘雪」にて殘雪の山の前の赤色のものは山に候哉、また此圖は何日頃何處邊よりの寫生に候哉次に第二輯續刊の御心有るにや(礫川愛畫生)◎枯草の山なり、色刷の都合にて少しく赤過し様なり、時は一月初旬場處は小田原早川の橋の

邊より、次で續刊は書肆の都合次第、第二輯には未だ着手せず ■自畫石版の一切の必要具は何程なりや又石版用インキは素人にも使用し得べきや(一紅)◎凡そ二圓位、又インキは使用し能ふ

## 讀者の領分

### 注

長文及水彩畫に無關係のものには御覽り。◎印は編者の答。投書の際の要點のみを掲ぐ。

■出舎に居る身の水彩畫研究者には尤も有効て尤も樂しかつた繪葉書競技會は先般來より休會となり實に落膽仕候、是非御都合遊ばし野黨の爲め從前通り御繼續下されたく候、在野同好の士奮つて御賛成を祈る(一紅)■一 競技會がなくなつて紙上が淋しくなつた様だから應募畫の大きさを十六切(ワツトマン)位迄にされては如何。二 水彩畫講習會を一度位東北地方で開催するも善さそうなものですがあまり無情ですな(陸前一一生)◎一 實行します御送り下さい。二 熱心なる希望者が多くして收支が償へば何處でも開きます、講師の報酬などはなくてもよろしい ■『みづゑ』二十三は大下先生が大奮發せられたので大成功、口繪の原色版は外國の美術品を見るの感あり鮮麗(赤坂虹生) ■口繪はやはり石版にせられたい(下妻KT生) ■『みづゑ』の口繪が原

## 近事雜聞

△水彩畫研究所三月例會には、成績畫の出品五十餘點、一等赤城泰舒氏の靜物畫、二等藤田規矩造氏の神田川の風景、三等鈴木一治氏の鬼子母神等なりし。

## 編者より

◎横濱KIT氏へ 熱心家があらば月に一度位いは出張してもよろしい、先づ會員を集めて後具體的に本會へ交渉せられたし◎淺草小松生へ 大きな繪を切取つた様で位置が窮屈なり、調子も整つてゐない、先づ墨繪を充分稽古してそれから彩色にかゝられたし◎陸中海老名氏へ いつも申す通、色彩あまりに強烈なり、和らかな調子の繪を示されたし。

嘗て本誌誌友諸君より御懇篤なる御音信に接し居候處、昨年初冬の頃より病床に呻吟し今回遂に死去いたし、平素申居候素志を遂げ得ず諸君には甚だ欠禮仕候、物故後、夫々御回答可申上筈なれども、何分にも御宿所等不明の爲め誌上の一隅を藉り茲に生前辱知の諸君に申譯旁御厚情奉謝候

(神戸市北長狹通壹丁目百十四)

枯星の兄 中臺藤吉

色版になつて嬉しいな、殊に今度の大下先生の繪はあんな圖はいくらも近處にころがつてあるのに僕等の描かないのを諷し且大なる教訓を與へて居る、猶挿繪として大下丸山兩先生筆の畫を寫眞版で毎號澤山に願ひたし(横濱Y.T生)『みづゑ』一二三號頃のやうに寫眞版として大下先生の作品を多く出されたし、吾等筆遣ひを見るに極めて便利多し(K.T)『文房堂で一才立つてゐたらハイカラな青年が來て繪具を見せて呉れといふので、店員が「へーどんなのに致しませう」上等箱入を呉れ「これは三圓ですが如何さま」少し高いコレはいくら「ソレは七十五錢で」これがよろしい」ハイカラは大いに上等品を買ふたようであつた(淺草小松)『大阪で開く水彩畫の講習會は一日も早く御發表を願ひます(熱望生)』心配のあまり蕪言を呈し候處早速御答を得て安心致候、ある者は名のため、ある者は利の爲め、ある者は自己の伎倆を他人と比較し研究するために博覽會へ出品さるゝといふ、其思想に高下こそあれ何れも利己的であるが、春鳥會諸先生の、趣味の普及の爲めと言はれたには實に何共申様のない感謝の念が起り申候(本郷紅生)『三宅先生の博覽會出品「森の下道」は千三百圓ときいてゐたが正札は百三十圓となつてゐた(物好生)』一寸博覽會の水彩畫の賣價を紹介し、三宅氏森の下道全紙百卅圓、全雲四

ツ切七十圓、河合氏夏日二ツ切百圓、大下氏江流二ツ切百五十圓、中川氏月夜百圓、とりいれ百五十圓何れも二ツ切、丸山氏麥焼く夕全紙二百五十圓、夏の光二ツ切百圓、織田氏樂器全紙二百圓、大橋氏牡丹、鶴ヶ岡何れも二ツ切で百圓宛、石川氏滿洲の風景三枚の方が二百圓、二枚の方が百五十圓まづ此位にして置ふ(P.H)『みづゑ』誌上に博覽會出品の水彩畫評を載せること、それから大下、丸山、大橋諸先生の出品畫を寫眞版(出來得べくは石版)で出されたく切望する(歸り途にてS生)『三宅先生の事を三宅博士の弟だと博覽會の看守が知つたふりで説明してゐた、一條成美君は公爵の兄弟かも知れない(傍聽生)』石川欽一郎氏の繪はガラスが壞れてゐる、三宅の克己氏の繪は殆ど縁との間に白く紙が見える何れも不體裁だ(麻布永坂生)『みづゑ』二十三の「丘の細道」は素敵に出來榮がよかつた靜かに目をつぶて見ると前景の道と枯木と、中景の森とが鮮かに浮んで來る實に十三の「夕雲」以來目の覺むる様だつた二 長野講習會の記事を讀んで實に羨しかつた我關西にもかゝる會の開かれんとを希望します三 本誌の「二」の簡易寫生法を讀んで多くの利益を受けたるものは僕ばかりではあるまい何卒あのやうなのを益々掲載されんことを願ひます(福岡、稻垣虹の橋)◎二 此度大阪迄御出なさい